

爆発的ヒットの秘密

藤本 幸久（映像作家）(C)1993

中年太りの気になる年になった。考えてみれば、学生時代から20年近くこれといったスポーツをしていない。ゴルフは暇と金がかかり過ぎる。手頃なスポーツが身近にないのだ。

日本のスポーツは輸入されたものが多く、競技として発展したものが中心だ。だからスポーツ人口に世代のかたよりのある。野球にしても、その母体は学校スポーツだ。中年になれば、見るスポーツとしての比重が高くなる。日本人はスポーツを楽しんでやることに不慣れなのだ。だから、遊ぶのがヘタというのが、何となく定説になっている。

ところがどっこい、パークゴルフは違うというのだ。北海道の幕別という町で、10年ほど前に生まれたものだという。年寄りも若い人も楽しんでいるらしい。

調べてみると、パークゴルフの発祥地、幕別町は北海道の東部、十勝平野のまん中にある。人口は2万人あまり、これといった特徴のない小さな町だ。昭和22年に映画の舞台になったことを、いまだに町のガイドに使っているくらいの平凡な町だ。

この町の教育長、前原懿さんがパークゴルフの産みの親だという。前原さんに誕生のいきさつを聞いた。

産みの親

「当時私は教育部長で、生涯スポーツの普及を考えていました。生涯スポーツというのは、幼児から老年まで親しめるスポーツということです。ゲートボールが当時も盛んでしたが、老人層が中心でした。私たちもゲートボールを福祉の枠で考えていたんです。

そこで新しいスポーツをいくつか調べた中にランドゴルフというのがあったんです。さっそくやってみたんですが、地面の上でボールをころがすだけで、さほどおもしろくないんですね」

公園が遊んでいる

「その時ひらめいたんです。公園の芝で、カップを切ってやったらおもしろいんじゃないか。公園がゴルフ場に見えたんです。幕別町は公園整備に力を入れていて、町民1人あたり50平方メートルになります。広いんですが、公園で人が遊んでなくて、公園が遊んでたんですね。

でも教育委員会で勝手に穴を掘ってゴルフ場に変えてしまうわけにはいかないでしょ。そこで公園を管理する都市計画課の仲間に話したら、それはおもしろい、すぐやりましょうとなったわけですよ。小さな町の良さですね」

年寄りには言うな

「いろいろな人に試してもらったんですが、年寄りには呼びかけませんでした。一番暇のある人たちですから、老人スポーツをひとつ増やしたただけにはなりたくなかったんです。世代を広げる目的がありましたから。

おもしろければ、老人たちは放っておいてもやるようになるっていう確信がありました。事実、これはその通りになりました」

前原さんの話をうかがっていると、まなざしのやさしさが伝わってきて、あったかい気持ちになる。老人だけのスポーツじゃさびしい。家族でやった方が楽し

い。前原さんの目線はハンディキャップを持った人たちにも向けられている。

まなざしの行方

「今のコースはもともと公園ですから、傾斜があったりして車イスでは難しいんです。ですから計画中のコースには、障害者用のコースを造ることにしています。」

実は娘婿が事故で下半身マヒになりまして、車イスなんです。障害を持った人が、いろんなことをやりたがっているのが、とてもよくわかるんです。道具も試作品を作っています。これからテストしてもらおうと思っているところです」

人にやさしい、自然にやさしいという言葉がもてはやされている。言葉の美しさに酔う時、私たちはもっと具体的なものであることを忘れてしまう。前原さんのパークゴルフへの情熱は、ひとりひとりの人間に対する想像力に裏打ちされているように思える。

パークゴルフの普及を通して、人と出会い続けているのが平塚治郎さんだ。人は平塚さんをパークゴルフの育ての親と呼んでいる。平塚さんがパークゴルフと出会ったのは、地元の企業、ニッタクスの事業部長だった時だ。ニッタクスの作っている合板を使って、パークゴルフのクラブやボールを作ってくれと、前原さんに頼まれた。現在のような形になるまで4年、13度の改良を加えたという。それからやみつきになった。

3年前ニッタクスを退職し、国際パークゴルフ協会札幌支部長として普及にあたっている。5年前、平塚さんが札幌に住むようになった時、札幌市内のパークゴルフ場は1カ所しかなく、やっている人もほとんどいなかった。

最初に手がけたのは、平塚さんの住んでいる郊外の住宅地、厚別区もみじ台にコースを造ることだった。目をつけたのは、道路脇の緑地。区役所に向けあっても、パークゴルフの説明から始めなくてはならなかった。近所の人たちもやったことのある人は、だれもいなかった。

あれから5年、このもみじ台コースの年間利用者は3千人を超えている。ひとりから3千人になった。

都会は人声が少ない。毎日の通勤電車はすし詰めだ。だが聞こえるのは、電車の走る音、車掌のアナウンスだけだ。公園に行っても、走りまわる子供たちの歓声を聞くのはまれだ。もみじ台のコースは、幕別の広々としたコースからくらべると狭い。狭いが、なつかしさがある。人の声があふれているのだ。

パークゴルフは 二度おいしい

「私は世話役ですね。コースも自分たちで造ったんです。最近はコースの草刈りに出てくる人が増えてきました。

パークゴルフはコミュニティスポーツなんです。健康と交流が目的なんです。『パークゴルフは二度おいしい』っていうんです。プレイで楽しんで、終わってからジングスカンやったりするんです。その日のプレイをさかなにもう一度盛り上がるんです。

公園の芝をそのまま使うので、フロックが大きいんです。初めての人が、ホールインワンしちゃうことがあるんです。

帯広で障害者の人たちにパークゴルフを教えたことがあるんです。片手しかない人とか、目が10メートル位しか見えない人とか。この人がうまいんです。ピンの方と距離を伝えと、きっちり打ってくるんですよ。ほんとうに楽しそうに。教えてよかったと思いましたね」

この講習会をきっかけに、帯広ではハンディキャップを持った人たちのパークゴルフが根づいた。毎月第2、第4日曜日、浄水場に作ったコースが障害者専用になっている。早い人は朝9時頃から、おもいおもいに夕方までパークゴルフを楽しんでいる。

白木秀雄さんは、体を折り曲げられない。でもやりたいと、体にあったクラブと、ボールを拾う道具を自分で作った。

右下肢に筋萎縮のある沼倉宏さんは、仲間と連れだって一般コースにくり出している。障害はひとりひとり違う。その違いに対応するには、ゆったりした時間が必要だ。そのためにいつでも使える専用コース

がほしいというのが彼らの願いだ。幕別に造る予定の専用コースの話をする、目が輝いた。そして、「帯広にもほしいですね」とつけ加えた。

平塚さんの住むもみじ台コースは、朝から笑い声が絶えない。中高年の女性が目につく。カラフルな装いだ。夫婦でプレイしている人に出会った。渡辺巳さん（70才）、京子さん（64才）夫妻。京子さんのはじけるような声が若々しい。

「ここには4年前に引っ越してきたんです。知っている人もいないし、さびしくてさびしくて、どうしようかと思っていたら、近所の人からパークゴルフに誘われたんです。私が始めて、嫁が始めて、今年になって夫と息子がやり始めました。

家族に共通の話題があるって、いいですね。もうちょっとがんばれば、とかね。家族でパークゴルフコースのある所へ旅行するんです。ニセコの方とか、思い切り打てて、みんないっしょで楽しいですよ。

私は血圧が高かったんです。上が180で下が120。血圧を下げる薬を飲んでいました。今は上が145で下が85になったんです。薬を飲まなくてもいいって、お医者さん言われたんです。体重も3キロ減ったんですよ。

年に500円の会費で、いつでもできるんです。安いでしょ。ちょっと心配なのは、このコースが道路の延長で削られるという話があるんです。こんなに楽しいんですよと行政の人たちにも知ってもらいたいんです。そうして、もみじ台で続けられるようにしたいねと、友だちと話しあっているんです」

女性がはつらつとしている時、家庭は円満のようだ。夫の巳さんは妻の話に、笑顔でうなづいている。

楽しみながらの リハビリ

広西一夫さん、72才。昭和57年に脳出血で倒れて、右半身マヒが残った。その後仕事を続けながら、リハビリをやってきた。仕事をやめた去年の3月、散歩をしていて、このコースでパークゴルフをしている人と出会った。それから1年あまり、今は毎日コースに出ている。

「パークゴルフがいいのは、苦にならない、楽しみながらできることです。歩くし、体を動かすし、空気もいいし、太陽にあたるし。

私、言語障害があるんです。このリハビリがたいへんなんです。家にいると話すと話すことが少ないでしょ。パークゴルフだと、いっしょにまわる人と話をするんですよ。それに笑うでしょ。

隣にいるのは、奥さんですか。いえ、ヨソの奥さんです。覚えたり、覚えられたりして、近所の人顔がわかってくるんです。

パークゴルフ始めて、特別に歩くりハビリやめました。今日は5回まわって、5千歩。ペタコン、ペタコン歩いてるんです。

最近右手で、字が書けるようになったんです。ミミズのはったような字ですけどね。うれしい。広西一夫と書いて、見た人がわかるようになったんです。

今日のスコアは29でした。みんなといっしょにペタコン、ペタコンまわってます」

都会にも パークゴルフの 風を送りたい

5年前1カ所しかなかった札幌市内のパークゴルフ場は10カ所になった。だが、パークゴルフの良さが、歩いてゆける場所でできる身近なスポーツであろうとするならば、この数でとても足りるとは思えない。都市公園は、多様な使われ方をしており、パークゴルフ専用とするには問題が多い。都市での普及は、これまで以上に可能なのだろうか。平塚さんは場所はたくさんあると言う。

「パークゴルフは、ゴルフのワンホールの広さでできるのです。18分の1でいいんです。地価の高い首都圏でも、周辺都市なら可能だし、工業地帯のグリーンベルトも立派なコースになります。これなど企業のイメージアップにもつながると思います。とりわけ大き

な可能性を持つのが、河川敷です。札幌には豊平川という大きな川が流れています。この河川敷にコースを作って、国際大会を開くのが私の夢なんです」

パークゴルフの先進地十勝では、河川敷にいくつかのコースが作られている。人気の高い幕別町のサーモンコースもそのひとつだ。ゆったりとした川の流れ。アオサギが時折、水にもぐりエサをとっている。このコースに立つと、なぜか心がなごんでくる。

パークゴルフ場が作れるような大きな川は、国や都道府県が管理している。地元自治体の一存で利用することはできない。サーモンコースは北海道開発局が管理している。河川敷の利用について、帯広開発建設部治水課長の岡部和憲さんに聞いた。

「去年、帯広に来たんです。私はゴルフをやるものですから、パークゴルフはお年寄りや子供のスポーツだろうと、少し馬鹿にしていたんです。こっちへ来て初めてやったんですが、おもしろいんですね。職員のレクリエーションなんかでもやってますよ。

最近出てくる市町村の利用計画には、パークゴルフ場は必ず入ってますね。

河川の利用というのは時代の流れと表裏一体なんです。北海道の川でいうと、開拓時代は道路がなかったですから、物資の輸送路だったんですね。内陸が開発されて農地が広がってくると、水の利用が増えてきたんです。高度成長期になると、工業用水として利用したり、工場廃水を流したりしたんです。つまり、これまでは川の機能だけを使うことに重点が置かれたんですね。

最近は生活環境を重視するようになってきて、水辺のうるおい感や河川空間の自然環境がやっと見直されてきたんですね。

河川空間の利用にしても、野球場ばかり造った時期があったんです。町場に土地がないから、河川敷をその代替地として使ったんです。これなども河川空間を機能としてしか考えていなかった例です。これからは、このような形にはしたくないと思っています。

川はまわりに住む人の生活様式を反映するんです。河川の利用は、まわりに住んでいる人が自分たちの生活をどうしようかということと、ほとんどイコールな

んです。パークゴルフは川に親しむという要素を持っており、いい利用のしかただと思います。時代にマッチした利用で、パークゴルフが盛んになるのは、いい方向だと考えています」

パークゴルフは時代の転換点に生まれたスポーツなのかもしれない。河川敷のコースでゆったりとした気分になるのは、私たちが自然とのつきあいを切実に望んでいるからなのだろう。私たちは大量生産、大量消費という経済の仕組みに少し疲れている。高度成長の時代に切り棄ててきた人の手のぬくもりを、今思い出している。

パークゴルフを 支え、支えられ

パークゴルフのクラブには職人の香りがある。ニッタクスのイタヤの積層材を使って、帯広の町工場で仕上げられている。

社長の後藤敏郎さんは木型一すじの人である。学校を卒業してから50年、木型に取り組んできた。木型とは、鋳物の砂型をとる木の模型のことだ。砂から抜くのに勾配が必要になる。そして精度が要求される。許される誤差は0.2ミリ。カンナ1枚かけすぎれば、超えてしまう。その範囲で木型を組んでゆくのだ。

同じように見えるパークゴルフのクラブだが、実を言えばひとつとして同じものはない。カンだけでヘッドの局面をつけてゆく。木型の仕事を始めて22年になる鈴木正美さんでさえ、最初の頃は、波打ったり、でこぼこになったりして、うまく丸みがでなかったという。

塗装の腕は、後藤さんの息子の都喜雄さんが一番だ。下塗り、中塗り、上塗りがそれぞれ2度ずつ、都合6回、塗っては磨く。その過程でだんだんと木肌の艶が浮かびあがってくる。クラブがどれも同じように見えるのは、ここで働く職人たちの腕なのだ。

今では売上げの9割がパークゴルフのクラブだ。木型の技術がクラブ生産の技術に溶け込み、生きている。木工の職人たちの技能を生かせる仕事がひとつ増えたのだ。

中国、ハルピン出身の申延春さんは開口一番こう言った。

「父が5年前、6カ月ほど帯広に大豆の研究に来ていて、パークゴルフ大会で準優勝したんです。その時の写真を見せて、よく帯広のことを話してくれました」

申さんは22才。高校を卒業して、帯広の短大に留学。この4月から、帯広市の国際交流課で働いている。帯広在住の外国人に情報を提供したり、国際理解のための教育をするのが仕事だ。

日本は戦争で、中国に大きなキズを残している。申さんの生まれた満州を、日本は15年間にわたって植民地としてあつかってきた。申さんが日本に行くと言った時、申さんの叔母は、「日本というのは恐ろしいところだから、行かない方がいい」と諫めたと言う。

それでも申さんは帯広にやってきた。帯広はきれいで静かな街だ。人は親切だという父の話に魅力を感じたのだという。パークゴルフ大会で準優勝した時の父の笑顔が、見知らぬ土地に行く申さんを力づけたに違いない。

日本に来てから申さんはおばさんに手紙を書いた。

「帯広の人は、父さんが言っていたように親切でやさしい人たちです。日本はおばさんが言っていたような恐ろしいところじゃありません。安心して下さい。でも、おばさんや中国の人が受けた戦争の被害を日本の人は知らない人が多いのです。これはひどいことです。私は中国のことを日本人にもっと知ってほしい。中国語講座を開いてみたいと思っています」

申さんのお父さんにとって、パークゴルフは帯広在住中の楽しい思い出のひとつに過ぎないことだろう。だが、国際交流の始まりとはこんなものではないだろうか。アジアからの留学生の多くが、日本を嫌いになって帰るのが現実なのだから。

十勝在住の外国人たちが、日本人といっしょにプレイする幕別町の国際大会。今年、6回目を迎える。前回は17カ国、日本人を含めて260人が参加した。今年は申さんも参加する。どんな出会いが生まれるのだろうか。

子供たちへ

スポーツ嫌いになる子供たちがいる。なぜだろう。パークゴルフで遊ぶ子供たちを見ていたら、大人のせいかもしれないと思えてきた。小学生にスポーツで順位をつけることが必要なのだろうか。競技スポーツが多すぎやしないか。もう少し大きくなって、自分で選べるようになるまで、大人たちは待った方がいい。

子供たちがパークゴルフを好きなのは、遊びだからだ。遊びで傷つく子供は、たぶん、いないだろう。

いろんな人が、 いろんな場所で

いろんな人が、いろんな場所でパークゴルフを楽しんでいた。

小学生が。

若者たちが。

病者もいた。

僕たち、中年のおじさん、おばさん。

ハンディキャップを持った人たち。

おじいさん、おばあさん。

外国から来た人たち。

人間にはいろんな個性がある。

それぞれ、みんな違う。

だから楽しい。

それがパークゴルフ。
